





## プレイリスト 1

### 1. 「photogene × afterimage」 9'18"

作曲家名：坂野伊和男/BANNO Iwao

作品解説：梵鐘は、その昔朝夕の時を知らせたり衆を集めたりするためのものであったそうだ。今でも時を告げるために鐘を鳴らしているお寺はあるだろうけれど、それが聞こえる環境に住んでる人はどれほどいるだろう。私も長い間聞いた記憶がない。そんな梵鐘の音の持続，うなり，余韻（そしてその世界観）に心惹かれるところなのだが，これがなかなか一筋縄ではいかなかった。音を重ねるに連れざらざらとした濁った響きになり，どうにも居心地の悪い感じなのだ。耳につく周波数帯域の成分を減衰させてまあまあ手懐けられたとは思っているのだが，そもそもお寺の鐘ってというのはひとつずつ鳴らすものであって，連打によって重なり響き合うものではない，ということなのだろう。妙に納得してしまった。

略歴：1959年 愛知県生まれ。九州芸術工科大学 芸術工学部 音響設計学科 卒業。同大学院 修了。学生時代に少しばかりの作品制作はしたけれど，あとはぼったり。おおむね 50 歳を迎えた頃，ふと思立って再開。CCMC には公募も含め 2012 年から参加している。

### 2. 「Morphoria II」 7分 14 秒

作曲家名：宮木朝子/Miyaki Asako

作品解説：「Opera acousma(見ることなしに聴くオペラ)III」の 1 シーン。

タイトルはモルフォ蝶、モーフィング、フォリアの意味を組み合わせた造語で、サウンド処理にはモーフィング技術を使用している。音素材には、無響室で録音された声、砂の音。

略歴：桐朋学園大学、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士過程修了、現在同博士過程に在籍。現代音楽を起点に、映像-香り-身体-特異な場などと関係を結ぶ音響制作とその空間展開、奄美群島の聖地におけるサウンドインスタレーションなどを行う。ソロアルバム『Virtual Resonance』は「磨き上げた鮮烈な響きの音像 (CD ジャーナル)」「雅楽とエレクトロニカ、現代音楽が交差する宇宙レベルのアンビエント (Beams Records)」と評される。ICMC2016、2019、New York City Electroacoustic Music Festival 2019 入選、5.1ch サラウンド音響作品〈Afterimage〉によって「坂本龍一|設置音楽展コンテスト」最優秀賞受賞。コニカミノルタ・プラネタリア東京「星空ラウンジ」にて、22.2ch のための空間音響展示『平均律 22.2ch Remix』を継続中。

### 3. 「且緩々」 7分 05 秒

作曲家名：由雄正恒/Yoshio Masatsune

作品解説：この曲は、「間」をテーマとした一連の作品の中の一つとして、電子音響作品として作曲されたものである。前作の、「間-静寂と喧騒 - "Ma" - moving silent and bustle」、「遠音近音 - 尺八と電子音響のための Wochi-Kochi for Shakuhachi and Electroacoustic」に続く 3 作目。

尺八：渡辺智克

兎角世の中というのは蠢めいていて休む暇なし。

—中略—

音楽では音が鳴らない箇所は休符、休符は休むものではない、ということ禅問答のようなことがある。

—中略—

この禅問答のような捉え方はいかにも日本美学のように思う。

—中略—

間、

この言葉というのはとても感慨深いものである。

・・・

結びは、まだ無し。

略歴：(1972- ) 神戸出身。作曲家、メディアマスター No.75。コンピュータによる芸術作品の創作を専門とし、アルゴリズムック・コンポジション、音響合成、ライブエレクトロニクス、メディア表現を題材にした創作研究を行っている。電子音響作品は、国内外 (ICMC-国際コンピュータ音楽会議、Contemporary Computer Music Concert, FUJI acousmatic music festival, MUSICACOUSTICA-BELJIN, Festival FUTURA 等) において演奏される。

昭和音楽大学作曲学科、IAMAS アートアンドメディア・ラボ科を卒業。日本作曲家協議会、日本音楽即興学会、情報処理学会音楽情報科学研究会会員、先端芸術音楽創作学会運営委員、日本電子音楽協会理事、昭和音楽大学准教授。http://masatsu.net

## プレイリスト 2

### 4. 「自撮りの背景にいる男の赤い唇」 10分

作曲家名：大久保雅基/Ohkubo Motoki

作品解説：録音された音はマイクやスピーカーの特性を利用し、実際の耳で聞く音とは異なる音色や音量となり扱われる。その誇張された音がまたエフェクトなどの変化によって新たなテクスチャを生み出し音楽を形成する素材となる。ヘッドフォンやイヤホンで聴く者にはダイレクトに音が届く一方で、スピーカーから放射された音は空間音響と混ざり合い、また新たな音の質感を生み出すだろう。様々な環境が重なりオリジナルの音にアクセスできない状況で、私達は何を聴くのだろうか？本作の音素材にはプラスチックやペットボトルなどの樹脂素材によって鳴らされた音が使われている。実際に目の前でビニール袋を擦られて聞こえるのではなく、マイクの近くで鳴らされたり、編集で音量がコントロールされるなど、自然に聞かれる状態とは音が異なる。名前の無い音によって音楽は作られていく。

略歴：1988年宮城県仙台市出身。プログラミングや音響機器等のテクノロジーによって音楽体験を拡張する作曲家。コンサート・オーガナイザー、サウンドエンジニア、プログラマとしても活動。tone運営。名古屋芸術大学芸術学科芸術学部デザイン領域、愛知淑徳大学人間情報学部、相愛大学非常勤講師。洗足学園音楽大学音楽・音響デザインコースを成績優秀者として卒業。情報科学芸術大学院大学メディア表現研究科修士課程修了。先端芸術音楽創作学会、日本電子音楽協会、日本AI音楽学会会員。Contemporary Computer Music ConcertにてACSM116賞(2010/東京)、Wired Creative Hack Award 2019にてSony特別賞を受賞。塩竈市杉村惇美術館若手アーティスト支援プログラム Voyage 2021に採択された。

### 5. 「begonia」 8 min. 50 sec.

作曲家名：森田信一/Morita Shinichi

作品解説：色々な音を採集し加工した。音素材の種類、音価、エンベロープ、スピードなどの要素を、試行錯誤しながら曲を組み立てていった。音階、音価、音色、音強など明快で単純な要素を組み立てる「音楽」よりも、採集した音(素材)を使って組み立てていくミュージックコンクレートは、音そのものによる創作といえるだろう。この創作活動は油絵などの絵画の作業に似ている。筆で描いたり塗りつぶしたりという絵画の創作に憧れるので、音で同じような作業ができることは楽しい。

略歴：東京理科大学で物理学を学ぶ。江崎健次郎主宰の音響デザイナー協会に加わったことから、「音展」(音の展覧会)での活動で、1973年から1979年まで電子音響作品を発表。東京学芸大学大学院で作曲と音楽教育学を学ぶ。作曲グループ“パッケージ21”(1984~1990)、その他で器楽作品を発表。電子音響音楽は、CCMC、Miso Music Portugal、FAF、Bourgeで発表。作曲家協議会会員。

## 6. 「stagnant spring, drifting inside」 10'19

作曲家名：佐藤亜矢子/Ayako Sato

作品解説：ぎこちない音たちは閉じ込められた。

停滞した春の内部で、彼らは跳ね回り、飛び散り、ひらひらとはためき、ふざけ合った。

--- いつもどおりではない漂流、パリと東京にて。

Clumsy sounds were confined.

Inside the stagnant spring, they scampered, splashed, fluttered, and frolicked.

--- unusual drifting, in Paris and Tokyo

略歴：作曲家。東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。リュック・フェラーリ研究で博士(学術)取得。主に電子音響音楽の領域で活動。日常の雑音・生活の音・物音などの録音物を素材とし、それらが孕む色・香り・質感・意味に向き合い、時に断絶を強い、咀嚼し・解釈し・脚色し、具象と抽象の境界でせめぎ合う音楽を構築する。映像や身体表現などとのコラボレーションも行う。作品はICMC、SMC、NYCEMF 他多数の国際会議や音楽祭に入選、受賞し、10ヶ国以上で上演、放送されている。受賞歴は Destellos Competition 2013 佳作(アルゼンチン)、Prix Presque Rien 2013 第三位(フランス)、Korea Independent Animation Film Festival 2019 音楽賞(韓国) 他。現在、玉川大学、大阪芸術大学非常勤講師、パリ第8大学客員研究員。

## プレイリスト 3

### 7. 「砂の言葉」 7分

作曲家名：山本雅一/Masakazu Yamamoto

作品解説：2018年制作。CCMC2018で発表。約7分。石垣島で採取した音素材を中心に展開している。

曲中に現れるパーカッシブな音は砂浜で拾った石を叩いたり擦り合わせた音。砂に触れると一粒一粒意思を持っている様でもあるし、集合体で一つの生命の様にも感じられる。そんなかわいらしい砂(達)はいつもひっそりと蠢いている…そして風や光と対話し、戯れる。

略歴：作曲家。山梨大学で藤原嘉文氏に師事。同大学院在学中に現代の音楽展「オーボエフェスタ」入選('01)。以後、ピティナ新曲課題曲作曲賞('04,'05,'08)、CCMC入選('05)、朝日作曲賞(吹奏楽)入選('15)他。2018年にピアノ作品を収めたCD「まどろみの中で」をリリース。2021年よりダウンロード楽譜ストア Piascore でオリジナル、アレンジ他の販売を始める。

電子音響の分野では、成田和子、吉原太郎の両氏に指導を受け、CCMC2002でデビュー。2012年には電子音響作品「Somescape」を再構築した歌曲「見る」を含む「谷川俊太郎の詩による2つの歌曲」で第19回奏楽堂日本歌曲コンクール第一位。ダンスや美術作品とのコラボレーションも積極的に行う。

現在、日本作曲家協議会、全日本ピアノ指導者協会、日本電子音楽協会他、各会員。たまにジャズを弾く。

### 8. 「M」 9'00"

作曲家名：仲井朋子/Nakai Tomoko

作品解説：“M”は、質・量共に大きい単位を表すために用いられるが、この作品は夢の比重といくつかのMに続くキーワード(money, mind, mountain, memory...)によって構想されている。主にリーマンショック後の某豪遊都市でのフィールドレコーディングの足取りを追いながら展開されており、ロード・ムービーとして作曲された。

略歴：テクノロジーを軸とした音/音楽表現を基軸に、空間の在り様を問う様々な作品に取り組んでいる。作品は「音楽と装置のトポロジー」(東京藝術大学大学美術館 陳列館)、青森 EARTH2014 (青森県立美術館)、マテリアライジング展Ⅲ (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)などで演奏、展示されている。

## 9. 「narco:mania」 6'30'

作曲家名：高橋哲男/Takahashi Tetsuo

作品解説：宮城県鳴子温泉で採音した音。水蒸気 こけし作りのろくろ 名物「しそ巻き」を揚げる店  
全てはホワイトノイズとなり大気に漂う。

略歴：Max/msp,即興,フィールドレコーディング、モジュラーシンセなどを用い複数のユニット、ソロ  
で活動。この春 レーベル“nord perdu edition 失去北方”の運営をはじめ。

## 10. 「Les flots s'élèvent -波立ち」

作曲家名：松宮圭太/Matsumiya Keita

作品解説：制作年 2014, 2021 この作品は、文化遺産の日に際して、パリ在住の作曲家と詩人が共同し  
て作品を作るプロジェクトにおいて制作した。Etel Adnan、Gabrielle Althen、Lionel Yung-Allegret  
による3つの詩の朗読を記録し、その朗読に内在するリズム、響き、旋律に導かれながら言葉の音を  
再構成した。朗読と再構成された言葉の音が折り合いながら、全く異なる音の世界、虫の声、デジタ  
ルの歪み、さざ波へと変質する。

略歴：愛知県立芸術大学、東京藝術大学大学院、パリ国立高等音楽院、IRCAM 作曲研究課程修了。第8  
回武生作曲賞受賞。フランス学士院より在マドリード・フランス・アカデミー第87代芸術会員に任  
命。クラングシュプーレン、現音 Music of Our Time など国内外で楽曲上演。「ギター小協奏曲」(ソ  
フィア王妃芸術センター 2017)、ハイブリッド・ヴィオラのための「奇想曲」(アルス・ムジカ 2015)、  
舞台音楽「阿修羅」(大駱駝艦・壺中天 2015) など。現在、大分県立芸術文化短期大学専任講師、相  
愛大学大学院非常勤講師。

## プレイリスト 4

### 11. 「街角スケッチ」 4分 25秒

作曲家名：岡本久/Okamoto Hisashi

作品解説：里山巡り、街歩きによく出かけます。というか時間さえあれば、そうした処ばかり訪れます。  
そこで聞こえる音は、その土地で暮らす人々にとっては当たり前なものなのかも知れませんが、私に  
とっては新鮮でかけがえのないものばかり。この作品はそうした音をモチーフとして作りました。

略歴：大阪芸術大学芸術学部音楽学科作曲専攻卒業。作曲を原嘉壽子氏、七ツ矢博資氏に師事。和声法、  
対位法をサルバトーレ・ニコローシ氏に師事。作曲や編曲、コンピュータ音楽をはじめオリジナル電  
子楽器製作、若手の育成など様々な活動を行っている。また音環境研究として、特に様々な里地里山  
地域の音の記録を行い、その特徴などの分析研究を行っている。関西国際大学教授、大阪芸術大学非  
常勤講師。音と音楽・創作工房 116 (ACSM116) 運営委員、神戸市音楽家協会会員、日本騒音制御工  
学会会員、日本サウンドスケープ協会会員等。

### 12. 「まどろみとこごえ」 4:47

作曲家名：上野航/Ueno Wataru

作品解説：年越しの思い出と備忘録。

元日の凍える寒さの中、徹夜で夢うつつ過ごした感覚を思い返しながらか旧年中印象に残った音を色々  
重ねてみる。

略歴：大阪芸術大学 音楽学科卒

同志社女子大学 非常勤講師

相愛大学 伝統芸能コーディネーター育成プログラム 特別研究員

13. 「Prrrr」 3'30"

作曲家名：永松ゆか/Nagamatsu Yuka

作品解説：細長い素材、粒つぶの素材、かたちを想起する音素材が散りばめられて脈略もなく展開する。かたちとおと、視覚と聴覚の比喩を意識しながら制作したエチュードです。

略歴：大阪芸術大学大学院博士前期課程修了。電子音楽の創作・研究に携わる。CCMC（東京・京都）、ボンクリフェス（東京）、ラジオ・フランス（INA・GRM）、The Lake Radio（デンマーク）など日本や欧州にて活動を展開。相愛大学音楽学部助教、帝塚山学院大学非常勤講師。

14. 「Canon」 2分43秒

作曲家名：山口真希子/Yamaguchi Makiko

作品解説：この作品は2018年3月にフランスで自ら企画したコンサートで初演されました。このコンサートは2人のクラリネット奏者と1台のピアノ、そしてスピーカーから演奏される曲で構成、展開される、45分ほどのひとつながりの演劇のような作品です。「Canon」はその作品の一部として、ホールに観客を取り囲むように設置された6台のスピーカーで演奏しました。

略歴：大阪府出身。大阪音楽大学卒業後、2009年渡仏。パリ国立高等音楽院作曲書法科、他、卒業。フランス留学中に様々な音楽に触れる過程でエレクトロアコースティックミュージックに出会う。現在、同志社女子大学嘱託講師ならびに大阪音楽大学非常勤講師。

15. 「令和であります」 3:33

作曲家名：ヤマシタユミ/Yamashita Yumi

作品解説：「令和であります」という一つの文章を音読した声のみを素材とし、制作した。ごく短いひと時の音も、いくつもの要素が存在し、様々に変化し得る可能性をもっている。

略歴：大阪芸術大学在学中に、電子音響音楽の制作を始める。以来「ボンクリ・フェス」等様々なコンサートに出品している。その他、ダンスとのコラボレーションやTV番組等への楽曲提供等を行っている。

## プレイリスト 5

17. 「Another Room」 11:01

作曲家名：高野大夢/Takano Hiromu

作品解説：本作は、時間と空間の「運動」およびそれらの相互作用に着目し作曲された。オリジナルは8チャンネル音響システムのための作品だが、本公演ではステレオにダウンミックスされたバージョンを上演する。

本作が焦点を当てる「運動」には2つの種類、視点がある。ひとつは、音楽の要素を空間全体で表現する「音楽の空間への積極的な展開」であり、上演空間をいわばひとつの楽器のように扱うことで「時間の運動」として音楽作品を捉えようとするものである。

もうひとつは、音楽の複雑な時間的側面に関わることによる「空間そのものの変容」である。つまり、空間を、「時間の運動」がそこで繰り広げられる入れ物のようなものとしてではなく、「時間の運動」との関わりにおいてそれ自身も変容する有機的な場として表出させることを試みるものである。

SICMF2020（ソウル、2020）にて初演。

略歴：作曲家。山梨県出身。

電子音響音楽を軸とした創作研究を展開し、近年はマルチチャンネル音響システムのための作品を多数制作する。作品はICMC International Computer Music ConferenceやCCMC Contemporary Computer Music Concertなど国内外の学会やフェスティバルにて上演されている。音響システムのエンジニアとしても活動し、国内外の数多くの作曲家の作品上演に携わる。

日本電子音楽協会会員。ACSM116 運営委員。

## 18. 「Soniferous Garden」 17:21

作曲家名：檜垣智也/Higaki Tomonari

作品解説：“特別な聴取の趣向に注意を払った作品。コンサートホールの扉を開けて、外からの音を作品の中に取り入れ、ランダムに発生するドアを叩く音、足音、通行人の声、車の通りすがりの音などは、ゆっくりと展開していく音のトラムの一部となり、作品の時間全体に存在している。ジョン・ケージの有名な格言「音をありのままに」を彷彿とさせる世界に開かれたパフォーマンス作品である。”(ミシェル・トジ、ResMusica 2020 年 8 月 27 日より抜粋)

この作品は、私たちを取り巻く音の風景に、さらに一本の補助線を引くようにデザインされています。この音楽の音量はとても小さく、繊細で、存在感が薄いものです。風鈴のように周囲の音風景にこの音を加えてご体験ください。

本作が収録された CD：檜垣智也「入院患者たち」(2021、enginebooks)

Amazon <<https://onl.la/sP7uc9Y>>

略歴：作曲、アコースモニウム演奏。1974 年山口県生まれ。愛知県立芸術大学大学院修了。博士(芸術工学、九州大学)。ハーバード大学、ケルン大学、Musiques & Recherches の音楽祭等で招待公演を行う。フランス国立視聴覚研究所音楽研究グループ、回路の詩神、高橋アキ等から委嘱をうける。第 5 回国際リュック・フェラーリ・コンクール最高賞(2003)、第 18 回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品(2014)など受賞、入選多数。ボンクリフェス電子音楽の部屋監修(2017-)。Futura 国際アコースマティック芸術祭、Motus 音楽カンパニーメンバー。Hirvi 代表、ACSM116 運営委員。東海大学准教授、大阪芸術大学客員教授。

<https://www.musicircus.net/>

## プレイリスト 6

### 19. 「Sym/Anti-Phonie II, version 2022」 30 分

作曲家名：長瀬元應/Nagase Gen

作品解説：2003 年以来アコースモニウム、マルチチャンネルなど生演奏を想定した作品ばかりを作っていたので、今回ネット配信という固定化された作品を出すにあたって、ぼくはどうやったらいいのかしばらく考え続けた。慢性疾患と経済的苦境の中では昔のような作り方はできないし時間の制約もある。2014 年に発表した作品の別バージョンを元に再構成した、といっても当時の発表を聴いた方が覚えているかどうか。残念ながら過去作の発表版が散逸しているのでどこをどう変えたか説明しても意味はない。簡単に言えばエゾハルゼミの合唱を主題にした長閑な変奏。挿入されるエピソードは別の過去作の一部。そういう混ぜ方をした作品には上記の漠然とした題名をつけることにしている。

略歴：1963 年東京生まれ。学習院大学仏文学科在学時に個人レッスンで作曲を有馬礼子氏、音楽史・音楽学を西原稔氏に師事。90 年代音楽・芸術関係の編集記者に従事したのち 2003 年 CCMC 夏期アトリエ参加。2010 年以降「長瀬元應／Gen0Nagase」名義で電子音楽作品を発表。CCMC コンサート、11、12、14 年富士電子音響芸術音楽祭 (FAF) および 15 年 FAF ANNEX FUJINOMIYA に出展。甲状腺疾患に伴う重症糖尿病や眼病などで活動休止していたが CCMC2018 以来の“復帰”。



## プレイリスト 7

### 20. 「HYPO HYPE SHAPE」 3'20"

作曲家名：川島大輔/Kawashima Daisuke

作品解説：解体と変形を繰り返す過程で、電子音響音楽のコンテクストと、過剰さを増しつつあるポピュラー音楽のコンテクストを接近させる。

そして文化的な再結合をはかる。

繰り返しの中で生まれた「基準となる軸」から外れた要素は、その軸を引き寄せるために揺り動かすを試みる。

制作記と詳細な解説は作曲者の SNS にて公開されている。

略歴：音楽家。東京を拠点に活動。NY・ロンドン・東京に拠点を置くコレクティブ Laastc では Pause Catti として活動。2021 年よりコレクティブ apn に参加。

クラシックや現代音楽、ジャズ、テクノ、ダブなどその源泉は多岐に渡り、彼が作る独創的で瑞々しい作品は国内外から評価を得ている。

2020 年 8 月に「FUJI ROCK FESTIVAL'20 LIVE ON YOUTUBE」に出演、DJ、マニピュレーターとしても活動。直近では 2021 年 2 月に、作曲家の坂東祐大との共作を大阪府豊中市立文化芸術センターの委嘱で発表した。その他久保暖とのユニット D+D では、2019 年 3 月に表参道スパイラルホールにてオーディオヴィジュアル作品「Transposon Live」を上演。

文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品、ICMC、CCMC2018 ACSM116 賞(審査委員長 三輪 眞弘氏)他授賞多数。

東京藝術大学大学院 音楽研究科 音楽文化学専攻 音楽音響創造研究領域を修了。

SNS など <https://linktr.ee/PauseCatti>

### 21. 「Ground Zero」 5分59秒

作曲家名：rakasu project

作品解説：かつて、私の祖父母が昭和 40 年代頃まで住んでいたアパートは、広島市の原爆ドームにほど近い「島病院」の隣にあった。

その病院の真上で、世界で初めての原子爆弾が炸裂したと言われており、最近では記念碑が建てられ、多くの観光客が訪れるスポットとなっている。

幼少期、私にとって原爆ドームや平和公園は楽しい遊び場であり、大人になってからは通勤ルート。あまりにも身近な場所であったせいか、祖父母との楽しく幸せな思い出に満ちていたその場所が、まさに「グラウンド・ゼロ」だったのだ、ということに気づいたのは、広島を離れ、被爆建造物も被爆樹木も無い京都に住み始めたここ数年のこと。この作品には、その祖父母宅に遊びに行った時に必ず遊びに連れていってもらっていた平和祈念公園と、

元・祖父母宅の前にある爆心地の碑の前でフィールドレコーディングを行い、採取した音素材のみを使用している。

略歴：広島大学大学院学校教育研究科修了。京都市在住。電子音響音楽や商業音楽制作、各種センサーを活用したパフォーマンスや、サウンドインスタレーション制作など幅広い創作活動を行なっている。京都精華大学ポピュラーカルチャー学部/メディア表現学部教授、同志社女子大学嘱託講師。

### 22 「Angel Blood」 9分30秒

作曲家名：大塚勇樹/Ohtsuka Yuki

作品解説：本作はボンクリ・フェス 2021「電子音楽の部屋」に提供するため 2021 年 8 月頃に作曲されたのち、2019～2020 年に「電子音楽の部屋」に提供した作品と共に Bandcamp で配信リリース (<https://moleculeplane.bandcamp.com/album/asylum>) をするため 10～11 月頃に改訂・リマスタリングを加えたものになる。モジュラー・シンセサイザーの音や、自ら録り貯めていた、あるいはインターネット上のライブラリで無償公開されているサンプル素材を中心に、主に位相の処理や音響的

な合成の面において「組織化された複雑性 (organized complexity)」を志向して作曲を行った。

略歴：京都府出身の音楽家、サウンド・エンジニア。大阪芸術大学で電子音響音楽の作曲およびアコースモニウムの演奏と音響技術を学び、同大学院博士（前期）課程を修了。Molecule Plane 名義でこれまでに CD アルバムを 2 作、配信にてライブ・レコーディング・アルバムを 2 作、EP を 1 作発表しているほか、国内外のコンピレーション・アルバムへの参加も多数。また、モジュラー・シンセサイザーの演奏家として多数のイベントに出演している。マスタリング・エンジニアとしてはこれまでに檜垣智也、福岡創、テンテンコなどの作品を手掛けている。

<https://push-it-studio.tumblr.com/>

## 23. 「unconscious repeat memory short 2022 ver」 6'28

作曲家名：石上加寿也/Ishigami Kazuya

作品解説：無意識の音の記憶。繰り返し再生される記憶。

\* 本作品は、2020 年 9 月にリリースされた作品「unconscious repeat memory」を再編集した作品である。

オリジナルバージョン：

<https://kazuyaishigami.bandcamp.com/track/unconscious-repeat-memory>

略歴：1972 年大阪生まれ。幼児期からテープレコーダーで遊びながらカットアップ・コラージュ風の作品を作り始める。高校生の時にミュージック・コンクレートとノイズミュージックに出会い本格的にテープ作品を作り始める。1992 年からソロライブ活動およびテープ音源リリースを開始。1994 年からコンピュータと音楽プログラミング言語 Max を使用したライブ演奏および作品制作をはじめ。1997 年フランス INA-GRM での夏季アトリエに参加。DR(ドイツ公共放送)での委嘱作品をはじめ、WDR(西部ドイツ公共放送)、FUTURA 国際電子音響音楽祭(フランス)、MUSLAB 国際電子音響祭(メキシコ)、SILENCE 国際電子音響音楽祭(イタリア)、ICMC 国際コンピュータ音楽会議 2015(アメリカ/テキサス)、Music From Japan 2020 (アメリカ/NY)などで作品上演をおこなう。自主レーベル NEUS-318 を主宰し、これまでに 100 タイトルを超える作品をリリースする。現在、「音の記憶」をテーマにした作品の制作をおこなう。

## プレイリスト 8

### 24. 「白川霊」 9分 22秒

作曲家名：牛山泰良/Ushiyama Taira

作品解説：本作は主に白川郷で録音された素材を元に制作されたホラー・アコースマティック作品です。白川郷には多くの特徴的な古民家があり様々な作品の舞台とされてきました。その数だけ IF の白川郷が存在しそこには何かは今も住み着いています。そんな IF の白川郷に迷い込んだ気分になれる作品です。あまり周りを気にしてはいけません。憑レテ帰ってはいけません。

本作はバイノーラル再生方式を採用しておりイヤホン・ヘッドホンでの視聴をお勧めします。またイヤホン・ヘッドホンにノイズキャンセリング機能がついている場合は ON の状態にしてください。

視聴中に霊障が起きたり気分が悪くなった方は速やかに視聴を中止してください。また作品中に意図せず謎のノイズやうめき声の様な物が載る可能性がありますのでご了承ください。

略歴：長野県出身。岐阜在住（近日中に関西に引越し予定）。電子音楽、サウンドアート作家、音響エンジニア、エリザベト音楽大学非常勤講師、IAMAS システム管理業務専門職。アコースマティック・アート団体『hirvi』に所属し多層化立体音響装置『アコースモニウム』を用いたコンサートやワークショップ等を行っている。

古楽器やお祭り等の「伝統的な何か」を取り込み、そこにあった情報を異質に変化させる事で違和あるいは混乱を誘う様な作風であり、その先にある忘我の時を目指している。

## 25. 「Little Ice Age (2022)」 10'40"

作曲家名：向山千晴/Mukaiyama Chiharu

作品解説：今からおよそ 1000 年前、地球は「温暖期」であった。

暖かい海水が大量に北上し、北極の氷が溶け出して大西洋に流出した。

それにより海水は冷却され塩分も希釈。こうして大西洋子午面循環は崩壊。

小氷期「Little Ice Age」の始まりとなった。

世界は雪や氷に覆われ、人々は飢饉や疾病に苦しむ。

世界は不安に包まれ、各地で宗教間対立が勃発。

魔女狩りも始まり、全ヨーロッパではこの期間に推定 4 万～6 万人が処刑されたと言われている。

今、世界はコロナ禍にあり、国内ではラニーニャ現象の影響で大雪が降っている。

真っ白い世界の中、私たちは様々な危機に瀕している。

「命」をどうやって灯していくのか。

「心」をどうやって守っていくのか。

同じ過ちを繰り返さぬよう、これから歩む先には何が広がっているのだろうか。

参考論文：

Little Ice Age abruptly triggered by intrusion of Atlantic waters into the Nordic Seas

<https://www.science.org/doi/10.1126/sciadv.abi8230>

略歴：フランス GRM で電子音響音楽を学ぶ。

1st アルバム『piano prizm』は国内・海外メディアで話題となり、続いて水中マイク (hydrophone) を使用した『waterproof』、スリッド・ドラム (波紋音) とフィールド・レコーディングを融合させた『blue flow』を発表。

最新アルバム『pure culture』はニューエイジ・No.1.レコメンド・ディスクとして注目を集める。

Out of the concert hall をコンセプトにライブを展開し、モエレ沼公園、横浜三溪園内旧燈明寺、白老トビウの森、夜の水族館などで開催する。

2018 年には香港アートセンター 40 周年記念企画「マルチチャンネル・ミュージックフェスティバル」(CMHK) のスペシャルゲストとして出演。

2020 年はアーティスト・イン・レジデンスで中国・麗江にて滞在制作。

<https://www.studio-cplus.net/>

## 26. 「それでも回っている - Still Turning」 8 分 36 秒

作曲家名：かつふじたまこ/Katsufuji Tamako

作品解説：世界が止まってしまったかのようなだった。

旅をすることも、歌うことさえも制限されてしまった。

心までもが立ち止まり、暗闇が何処までも続くように思えた。

それでも、そんな時でも、

猫は生まれるし、地球は回っている。

It was as if the world had stopped.

Traveling and even singing have been restricted.

Even my heart stopped, and the darkness seemed to continue forever.

Still, even at that time, cats are born and the earth is turning.

略歴：音作家。90 年代半ばより詩や言葉を用いた音作品の制作を始める。2000 年、INA-GRM の夏季アトリエに参加。2005 年 ACSM116 賞受賞。何気ない日常から小さな奇跡 (音) を拾い集め、紡ぎ出し、日常の隣のちょっとへんてこな世界を表現する。作品は、フランスはじめヨーロッパ各国でも紹介され、昨年は NY のインターネットラジオ番組で特集が組まれる。

一方、鍵盤ハーモニカやビー玉、ペットボトルなどの日用品で奏でる繊細な生音と、エレクトロニクスを用いた即興演奏でも唯一無二の音世界を作り出す。2018 年、Motus (仏) より作曲委嘱、パリ、ベルリンでのライブ演奏。

また、日用品で奏でる「日用品オーケストラ」ワークショップも展開中。  
<http://hello-tsukineco.jimdo.com>  
<https://tamakokatsufuji.bandcamp.com/>

## プレイリスト 9

### 27. 「能登への旅の追憶」 23分 11秒

作曲家名：林恭平/Hayashi Kyohei

作品解説：能登島は私が生まれ育った島。能登半島には様々な古き良き人々の生活が宿っている。輪島塗、白米千枚田、のとじま水族館……。私の両親は能登出身者であり墓参りの旅に訪れた能登半島の夏の思い出。日本海から運ばれてくる塩の匂い。あの風に今こそ私は乗り、あなたを能登の旅情へと誘いたいのです。それは、輝きとなり、きっとあなたは能登の虜となるでしょう。さあ！私があなたを、能登半島へとエスコート致します。

略歴：1984年福井県で生まれ兵庫県三田市で育つ。大阪芸術大学大学院作曲コースにて、七ツ矢博資、上原和夫、宇都宮泰、檜垣智也に師事する。フランスにて1979年より続く伝統ある電子音楽コンクール、ルイジ・ルッソロ電子音楽賞の日本代表の陪審員として2016～2021年に任命されている。2019年度、若尾裕が主催する『Creative Music Festival 2019』の講師を務めた。2020年、BBC RADIO 3（イギリス）にて自作の電子音響音楽作品が放送される。

2015年度 Prix Russolo(フランス)にて Grand Prix Russolo と 1er Prix Russolo を同時受賞。Paris Festival for Different and Experimental Cinema. This 21st festival edition(フランス) 入賞。Prix Presque Rien（フランス）3位受賞。（敬省略）

### 28. 「LDJ」 10:38

作曲家名：渡辺愛/Watanabe Ai

作品解説：器楽版の「LDJ」はヴィオラと電子音響によるミクスト作品です。2019年10月26日、永福町ソノリウムにて甲斐史子さんのヴィオラ演奏で初演されました。その後ボンクリ・フェス2021にて4ch Mix ヴァージョンが初演、2ch ステレオ Mix ヴァージョンは本日のCCMC2022が初公開となります。

この曲の中にはリトアニアとドイツと日本の作曲家が同居しています。2012年の12月半ば、私は友人のドイツ人作曲家と一緒にパリ郊外の市場を回っていました。その時の音を使ってデッサンしてみましたら、妙にはまったのが18世紀リトアニアの作曲家オギンスキによるポロネーズでした。リトアニアのL、ドイツのD、日本のJでLDJです。

電子音響版の録音とミックスは東京藝術大学で行われました。

---

ヴィオラ：甲斐史子

ヴィオラ録音：竹内朗

ミックス：森永実季

ポロネーズのチェンバロ演奏：本間みち代

略歴：作曲家。アコースモニウム演奏家。フィールドレコーディングを含む電子音響音楽を中心に活動する。東京音楽大学を経て渡仏、パリ国立地方音楽院修了。東京芸術大学大学院博士後期課程修了。リュック・フェラーリ研究で博士号を取得（学術）。第一回東京音楽大学学長賞（日本）・TEM主催JAPAN2011受賞（イタリア）、ピエール・シェフェール賞セミファイナリスト（フランス）、第三回プレスク・リヤン賞ファイナリスト（フランス）、国営ラジオでの放送（France Musique）、FUTURA（フランス）、NIT（スペイン）、ICMC2018（韓国）等国内外で評価を得る。東京芸術大学・尚美学園大学・昭和音楽大学各非常勤講師。日本電子音楽協会理事。先端芸術音楽創作学会会員。JWCM女性作曲家会議メンバー。<http://aiwatanabe.tumblr.com>

## プレイリスト 10

### 29. 「Nelumbo」 1'22"

作曲家名：仲條大亮/Nakajoh Daisuke

作品解説：蓮は泥より出でて泥に染まらず（東洋、中国）、その実は夢見心地の忘却を誘う（西洋、ギリシア）。

2017年から蓮をモチーフにアコースマティックな美学的本質を探るプロジェクトを進めており、本作は60秒のジングルとして2019年に制作しました。タイトルは蓮の学名からつけています。グラフィックの素材に使用した画像は2017年に撮影し、2022年に加工しています。

略歴：国際基督教大学アジア文化研究所研究員

音楽学、メディア情報学研究、メディア作品制作

ほか音楽、映画等エンターテインメント関連セールスプロモーション、システムコンサルティング

2005年度MOTUS夏期アトリエ参加、アコースモニウム向け作品としてはCCMCに2005年から定期的に作品を出品。

### 30. 「From the Moon World」 7分00秒

作曲家名：田代啓希/Tashiro Hiroki

作品解説：この作品は「月」自体から着想を得て、オブジェ・ソノール概念に基づき具体音や電子音を用いて制作された電子音響音楽作品である。

科学技術が発達した現代でもまだまだ未知の存在である月は、我々にとって身近な存在でありながら遠い存在でもある。その姿は時にフィクションの物語の舞台として幻想的で不気味な存在として描かれたり、人類の進歩の歴史に刻まれる重要な舞台として存在したり、その形は様々でありながらも常に人々を魅了し続けている。

幻想的でありつつ時に現実的な姿を見せる月の情景を、聴き手はそれぞれ自由な解釈で想起してもらいたい。

略歴：神戸市出身。電子音響音楽の作曲・演奏を主な活動フィールドとして、「自由なイメージを想起できる音」をテーマに作品制作に取り組む。またエンジニアとして、録音・音響技術のみならず映像撮影やLIVE配信に関する技術サポートも行っている。

これまでに、Contemporary Computer Music Concert(2016-2019 東京)、FESTIVAL FUTURA(2019,2020 仏)、ボンクリ・フェス(2019-2021 東京)などで作品を上演。

Contemporary Computer Music Concert2019にてFUTURA賞、2020にてMOTUS賞を受賞。

大阪芸術大学大学院博士課程前期芸術研究科芸術制作専攻作曲研究領域(電子音楽)修了。

電子音響音楽・アコースモニウム演奏を檜垣智也、音響技術を宇都宮泰の各氏に師事。

### 31. 「Étude 2022」 10分

作曲家名：葛西聖憲/Kasai Masanori

作品解説：低音にこだわった作品です。なるべく、低い音だけで音楽を上手く表現ができないかと創り始めました。途中からは中音域の音も聞き取れます。なお、基の音源は、シンセサイザーの音と、そんな風には聴こえませんが生のオーケストラの音です。

略歴：東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。パリ国立高等音楽院の作曲、管弦楽法、和声およびフーガのクラスをともに一等賞にて卒業。創作活動の一環として、1999年以来、ほぼ毎年のように『Étude』と名付けたコンピュータ作品を発表している。同志社女子大学音楽学科特任教授。

### 32. 「感染する耳—Pandemic Ear」 7分16秒

作曲家名：成田和子/Narita Kazuko

作品解説：巷に溢れているシンセサイザーの音であるが、音との出会いによって好みが作られるように

思う。2年前に作曲したピアノと電子音のミクスト作品では、電子音のパートでインベーダーゲーム機の音がするとピアニストから言われた。まだカフェとは呼ばれていない時代の喫茶店のテーブルに、インベーダーゲーム機が組み込まれていたことを、私の耳は覚えている。また、グラニューラー・シンセシスの音に惹かれるのはUPICとの出会いがあったからかもしれない。「感染する耳—Pandemic Ear」で用いられている素材音はすべてシンセサイザー Moog Voyager の音である。Moogにかじりついてキーを叩いてつまみをいじっている時、耳は遠くの昔に思いを馳せていたのであろうか。いずれにしても私の音は、若い人たちが好んで用いている音響合成音やソフトシンセの繊細な音とは異なるようである。

略歴：作曲家。パリ国立高等音楽院で音楽理論や作曲、電子音響音楽を学ぶ。日本およびヨーロッパで、数多くのアコースティック作品やアコースマティック作品が上演されている。ミュージック・クリエーション夏期アトリエの運営および音と音楽・創作工房 116 (ACSM116) の創立に携わり、毎年、CCMC の企画開催に従事している。同志社女子大学学芸学部音楽学科教授。